

## ディオニシオス・アレオパギテースのシンボル解釈とその原理

—— 聖書における若干の実例 ——

### はじめに

周知のように、『ディオニシオス文書』は六世紀の前半頃に知られるやいなや、キリスト教の伝統において絶対的權威とみなされ、神秘思想や否定神学、神学的美学、スコラ哲学などの各分野に、千年以上にわたり多大な影響を与え続けてきた。他方で、同伝統においては、『文書』が聖なるシンボルにまつわる根本的な文献であることも広く認められている。というのも、『文書』で述べられている聖なるシンボルの理論は、キリスト教世界における同様の伝統理論の中で、最も完成されているからである。ところで、

### リアナ・トルファシユ

ディオニシオスのシンボル理論は様々な側面を有している。その例を挙げるなら、たとえば、シンボルが存在し得る宇宙論、割符としてのシンボルがもつ意味、シンボルの存在論的および形而上学的基礎（因果関係論、分有論、内在論など）、シンボルの使用文脈（聖書および秘蹟におけるシンボル、また、それについて解釈と説明を行う際に、ディオニシオスが用いている他のシンボル）、シンボルの必要性、役割、シンボルの解釈をつかさどる原理などである。

本稿の目的は、とりわけディオニシオスについて解釈を行う者が満たすべき条件とは何なのか、また、シンボルの解釈原理とは何なのかを明らかにすることである。そのた

めに、聖書の記述から幾つかのシンボルを例に取り、それらについてディオニシオスが行っている解釈を紹介し分析したい。

#### 本稿の構造

1. シンボル解釈の必要性とその理由
2. シンボルの解釈を行う者が満たすべき条件
3. シンボルの解釈原理——存在階梯に応じたシンボルの「ふさわしい適合」
  4. 1. 「大」と「小」および「不動なるもの」と「動くもの」という神名の解釈
  4. 2. 神の「三次元」の解釈
  4. 3. 「火」のシンボルイズムの解釈
1. シンボル解釈の必要性とその理由

シンボルイズムにとつては特に重要な文献である第九書簡において、ディオニシオスは次のように述べている。

特に神の教えを説く者たちの伝承は二とおりである  
と考えねばならない。一つは言葉で言い表し得ない

神秘的な伝承であり、もう一つは明らかでより容易に知り得る伝承である。つまり、一方はシンボルの（symbolike）神秘的であり、他方は哲学的で論証的である。また言葉で言い表し得るものの中には言い表し得ないものが編み込まれている<sup>1)</sup>。

この引用から分かるように、ディオニシオスによれば伝承は「シンボルの言葉」、そして「哲学的な言葉」という二つの「言葉」によってその教えを伝える。そして両者は完全に相容れないものではなく、交差しあうものであり、前者は後者の中に混ざり合っているのである。両者とも内容は神や神に関する事柄および天上的の知性について語ろうとしているが、それをそれぞれ独特の仕方によって行っているのである。哲学的な言葉と比べてシンボルの言葉はそれほど平明ではなく、容易に捉えがたい神秘的なものであり、神秘体験を前提とする。にもかかわらず、超越的な実在は哲学的な言葉の「道具」である論証を超えるゆえに、それを語るためにはシンボルの言葉の方がよりふさわしいのである。

しかし、それらの実在を覆うシンボルはしばしばわれわ

れを途方に暮れさせる。同書簡でディオニシオスは、聖書において神が描写される際の荒唐無稽とも思われる記述による混乱を取り除くべきであると述べている。

言葉で言い表すことのできない知をもつわれわれの父祖が、隠された大胆な謎を用いて、……あるいは神について、あるいは神秘についての真理を示すたびに、神秘体験をしていない靈魂はそれを全く無意味なものであると感じる。それゆえわれわれの大半は神に関する神秘についてのことばを信じようとしない。……事実、神のシンボリックな表象 (symbolike hieroplastia) を外から見ると、これらの表象は実に大きな信じられない奇怪な空想によって満たされている<sup>(2)</sup>。

第九書簡は、旧約聖書に見られるこのような不適合性を多くの例とともに挙げている。

神の可知的な摂理に関して……、表象化は神を人間の形にしたり、野獣やその他の動物、植物、石などの変化に富んだ形をあてがい、神に女の装いをさせ、異邦

人の甲冑をまとわせ、職人に対するように神に陶芸の業や鋳物工房を与え、神を馬や戦車や玉座のうえに据える。……酔って、うとうとしていて、二日酔いの神を描いている。……神の激情、苦しみ、さまざまな誓い、後悔、呪い、怒り、……について人は何と言うのだろうか<sup>(3)</sup>。

ところで、天上的知性についても同様のことが言える。ディオニシオスは『天上位階論』第二章において天使に関する異様な記述を文字通りにとる危険に対して、第九書簡で神の場合になしたのと同じような強い警告を発している。

聖書の聖なる記述はどのような聖なる形象によつてその天上の階級を表現しているのか……ということ述べなければならぬ。それは、多くの人々が行つていくような次のような冒瀆的な思いをわれわれが抱かないようにするためなのである。すなわち、天上にいる神のごとき知性がたくさんの足やたくさんの顔のようなものをもつていたりとか、……鳥の毛の生えた翼をつ

けた姿をしているとか、……その他どんなものも、それが天上にいる神のごとき知性であると思つてはならないのである<sup>(4)</sup>。

このように、天上的知性を表示するために用いられている多くの表象は不適切であることをディオニシオスは認めている。聖なる事柄ならびに天上的知性を表現するため、それらに似つかわしくない、不適切なシンボルが用いられていることは事実である。しかし、より適切な表象と同じく、これらにも存在理由がある。そればかりか、このような不適切なシンボルは、適切なシンボルに比べて勝つているとさえ言えるのである。この点に関してはディオニシオスの考えを次のように要約できよう。

神的な事柄および天上的知性に似つかわしいと思われるシンボルの表象——たとえば「善」「正義」などという神名、あるいは天使たちが有している「黄金色の顔」「翼」など——は、一見したところ適切だと思われる。しかし、このような表象はその崇高さのゆえに多くの人をだます可能性が高い。というのは、人はシンボルが象徴している実在そのものがシンボルと同一であるという考えに陥りやす

いからである。しかし、シンボルの表象はいかに崇高であろうと所詮、それが象徴する超越的な実在を完全に正しく表すことはできない。不適切なシンボルの表象はかえって、こうした危険を取り除く。というのはこのようなシンボルの表象が不適切であるということ自体が、文字通りに受け容れられる危険を少なくするからである。そしてかかるシンボルの表象が荒唐無稽であればあるほど、その解釈の必要性は明らかになるのである<sup>(5)</sup>。

## 2. 解釈を行う者が満たすべき条件

それらの信じがたい形にもかかわらず、シンボルはその「内に」崇高な「教え」を秘めている。しかし、以下の引用でディオニシオスが示すように、この「教え」を得るためにはシンボルの「美しさを見る」ことが必要である。

これら（神の表象あるいはシンボル）のすべてにはその内に隠された美しさを見ることができらるなら、神秘的な神のなすべてが神のごとばの光に満ち溢れていることを見いだすであらう<sup>(6)</sup>。

この引用において重要なのは、神の表象、つまりそのシンボルが「内に美しさを秘めている」ことである。そしてシンボルの解釈は、まずこの「美しさを見」、次いでそれを可能な限り述べることだと言える。ただし、この美しさはシンボルの「内に」あるゆえ、肉体的な眼では見えないということは何も言うまでもない。

では肉体的な眼によらずに「見る」とは、ディオニシオスにとっては何を意味するのであろうか。このことに関して彼は次のように言っている。

最高に聖なるもの（シンボル）は真に神性を愛する者たちにのみ姿を現す。彼らは聖なるシンボル（*hieria symbola*）に関するすべての子供じみた空想を捨て去り、……知性の純一性をもって、観照（*theoria*）のための十分な力をもって、シンボル（*symbola*）の超越的で単一な真理に近づくことができるからである。<sup>27</sup>

このように、シンボルは「美しさ」だけではなく、「超越的で単一な真理」をも保有する。と言うよりはむしろ、

この両者は唯一のものとして存在する。シンボルに隠された「美しさ」とは同時にその「真理」に他ならないのである。その真理であろうと、あるいはその美しさであろうと、シンボルに達することは、それを観照することである。したがって「真に神性を愛する者」は「シンボルの超越的で単一な真理」と同時に「その美しさ」をも「観照する」「見る」のである。しかし、このような観照（*theoria*）の「器官」は肉体的な眼ではなく、「魂の眼」<sup>28</sup>、「知性の眼」<sup>29</sup>なのである。神的なおよび可知的な実在を實際に観照する場合、「知性」という言葉が現に使用されていなくても、観照は「知性的観照」（*noetic theoria*）<sup>30</sup>、「知性による観照」しかありえない。一方、「知性による観照」とは「知性による認識（知ること）」に他ならないということもつねに念頭に置かなければならない。

ところで、「観照のための十分な力」、「シンボルの超越的で単一な真理に近づく」という表現が示すように、知性による観照にも、また、シンボルの真理の「場」である神への道にも段階があるが、それは同じ一つの上昇過程における段階である。言い換えれば、認識上の上昇である観照と並行して、存在上の上昇、つまり存在論的階梯における

内的存在様態の上昇が行われる。そしてシンボルの真理に達し、それを観照し認識するための条件は、「知性の純一性」を現実化することである。この条件が満たされて初めて「知性の眼」は開くのである。そして知性が徐々に浄化され、純一化（統一化）される過程における段階は、存在上かつ認識上の段階に他ならない。

デイオニシオスはシンボルの真理に達する条件を異なった表現によっても述べている。

神の名の解明に移ろう。……神について書かれた事柄の真理が我々に示されるのは、人間の知恵から出る説得力ある言葉においてではなく、聖なる言葉を記した人々の聖霊に動かされる力による証明においてである。この力によつて我々は、語ることも知ることもできないものと、語ることもできない仕方<sup>11)</sup>で結合される……優れた合一によつて結合されるのである。<sup>12)</sup>

この引用で明らかのように、神名という神のシンボルについて可能な限り語る——説明したり解釈したりする——ために「人間の知恵」に基づくのではなく、聖霊の内的な

働きかけが産み出す力に基づくべきである。そして「語ることも知ることもできないもの」、つまり神名を語りたい者は、それらの神名が示すところ、つまり神に聖霊の力によつて「合一によつて結合される」という条件を満たすべきである。すなわち、神名に限らず、いかなるシンボルも真に解釈すること、シンボルの真理と美しさを知性によつて観照することができる者は神との合一に達した者、「神の如き」者、神化 (Theosis) に達した者のみである。デイオニシオスは、ヒエロテオスの例を挙げる。

〔聖書における〕知性的言葉を神からの直接の示現によつて観照することと、それらの言葉を総合的に教育するためには〔神の如き導師ヒエロテオスのような〕成熟した力が必要であらう。<sup>13)</sup>

この点に関しては、ルネ・ロックが次のように述べている。

シンボリズムは、知性がそれに意味を与える限りにおいてのみ価値を持つ。そして知性がすでに神的なものになつて始めてシンボルに意味を与える。……神的な

事柄や神の言葉（つまりシンボル）を理解するために人は自分自身神的なものにならなければならぬ<sup>13</sup>。

知性にとつて、シンボルの意味の復元を行うことは、知性自体が一なるものに類似しない限り不可能である<sup>14</sup>。

ところで、神化以外でシンボルの意味について知識を得ることに關し、ディオニシオスは次のように述べている。

我々は、……我々より優るものの觀照を行い得ぬ人々を助けもしないで放置するに堪えず、遂に著作することと心を決めたのであった。しかしそこで我々は新しいことを導入することは敢えてせず、ヒエロテオスによつて真に総合的に語られたことを分析し明らかにしながら、各々の部分に従つた、より細部にわたる検証に努めたのである<sup>15</sup>。

換言すれば、ディオニシオスによれば、聖なるシンボルの意味を知るための道は、二つである。一つ目は「神の如き」であるヒエロテオスの場合のように「神からの直接の

顯示によつて觀照する」、すなわち知性的觀照による仕方であり、二つ目はディオニシオスの場合のようにヒエロテオスから知つた解釈を伝達する仕方である。このように、ディオニシオスにとつてはシンボルの意味は勝手な推測に基づいては得られない。人が自分自身で觀照して意味を獲得するでなければ、あるいはこのようにして獲得した人から受けるのでなければ、シンボルの意味は得られないのである。

### 3. シンボル解釈の原理——存在階梯に応じたシンボルの「ふさわしい適合」

ディオニシオスによるシンボル解釈の原理を紹介するに当たつて、まず神名の解釈における一個所を引用する。

万物の彼方にある神について語る時には、形や形態の多様性は、神にふさわしく聖にして神秘的な解釈によつて淨化されなければならない<sup>16</sup>。

そしてこの説明をより明らかにするため、ディオニシオ

スは次のような例を挙げる。

もし物体のもつ三次元を触れ得ず形のない神に適用しようと思えば、神の「幅」とはすべてのものに拡がってゆく神の発出をさすのであり、神の「長さ」とはすべてのものに極度に張りつめる力であり、「深さ」とはいかなるものによっても把握されず知られることのないその秘密をいうのである。しかし我々が忘れてはならないことは、様々の異なつた形態や形について解釈してゆくに当たつて、非物理的な神の名を、感覚的シンボル (symbola) による神の名と混同しないように気をつけるべきことである<sup>(17)</sup>。

右の引用における「神の三次元」の解釈の分析については、のちに考察することにする。ここで重要なのは、ディオニシオスが、シンボルが意味するところと、シンボル自体を「混同してはならず」、後者を前者が属する存在論的レベルに「ふさわしく」適合させる必要があると述べていることである。そしてこのことは天神的知性にも当てはまる。

形をもつたシンボル (symbola) としてさまざまに描かれているのは、超越的な光、可知的な光、要するに聖なるものだけではない。……さらに知性的で可知的な天使たちの神々しい装飾も色とりどりの形、さまざまな火をかたどつた模様で描かれる。それゆえ、同じ火の似姿であつても、場合にに応じて異なつた仕方であける必要がある。ある時は知性を超越する神に従つて、……またある時は天使たちに関連して。……それゆえ聖なるシンボル (hiera symbola) を混同してはならず、「それぞれの实在によつて」ふさわしく適合させなければならない<sup>(18)</sup>。

ところで、「シンボルをふさわしく適合させる」、つまり「シンボルを、シンボルが意味するところの存在論的階梯において占めている段階にふさわしく転移させ、移動させる」という、ディオニシオスによるシンボルの解釈原理の必要性は、シンボルの存在それ自体に由来する。ジャン・ペパンが述べているように、

シンボリズムの働きは存在の異なつた段階を前提とす



るゆえ、シンボルと象徴されたものとは同じ存在段階に属さないものである。……そうであるからこそ、シンボルのディオニシオスの伝統にとつては、シンボルと象徴されたものとの間には「存在上の」必然的な隔たりが存在するのである<sup>19)</sup>。

ディオニシオスは「シンボルをふさわしく適合させる」というシンボルの解釈原理を繰り返して述べている。

天上の者たちにある程度ふさわしい形象を物質という最も軽蔑される部分から作り上げることが可能なのである。なぜならば、もろもろの類似性が、言われているように、異なった仕方で理解され、そして知性で捉えることのできるものの特性についても、感覚で捉えることのものであるの特性についても、一様ではなく、それぞれにふさわしく適切に定められる「必要がある」<sup>20)</sup>。

このように物質から引き出されたシンボルと、その非物質的な意味とは、たとえ両者に同じ名称、同じ性質が賦与されているとしても、意味上ではけっして同一ではない。

このような名称や性質は、それが属する存在段階において考慮されなければならない。可知的なものと可感的なものとを引き離す存在論的「距離」を考慮せねばならない。以下、ディオニシオスによるシンボルの解釈原理を示すもう一つの例を挙げよう。

知性によって捉えることのできるものであつてしかも知性を有しているものたちに対しても、物質的なものから、上に述べられた似つかわしくない類似物（シンボル）を作ることができるのであつて、それは、感覚によつて捉えることのできるものに適用されるのとは違う仕方、知性を有するものに適用されるのである。「たとえば、」怒りは理性をもたないもの（獣）においては激情から生じている……のに対して、知性をもつたものについては怒りというものを別の仕方、理解しなければならぬからである。つまり、私の思うには、それは神のごとき不変の基盤に立つ彼らの雄々しい理性の働きと厳しい姿勢を示しているのである<sup>21)</sup>。

言い換えれば、可感的世界における怒りを、シンボル

として用いて可知的なもの「怒り」と言うときには、この怒りに存在論的段階の適合がふさわしく行われていなければならぬ。動物の怒りに対応する天上的知性の「怒り」は、その「雄々しい理性の働き」なのである。つまり、シンボルを類比関係により考える必要があるが、この概念は次の引用を分析することによってより明らかになる。

ディオニシオスはまたシンボルとしての激情については次の例を挙げる。

われわれが非類似の類似性 (anomoioi homoioties) (という原理) に従って、前に述べたもろもろの動物の詳細な特性と体のすべての姿形を天上の諸力に適用することは不適當なことではないであろう。つまり、それら動物の激しやすさは、知性的な勇氣に帰せられるのであるが、激情というのはその勇氣の最もかすかなこだまにすぎない。それにまた、それら動物の欲望は神の愛に帰せられる。簡単に言えば、理性をもたない動物のすべての感覚とさまざまな部分は、天上の諸存在の非物質的な知性の働きおよび一なるものに似た方に帰せられるのである<sup>(22)</sup>。

一方、動物の激情と知性的な勇氣という天使の「激情」は対応関係にありながら異なるが、このことは両者の非類似性を示している。他方、動物の激情は天使の「激情」である知性的な勇氣の「もつともかすかなこだまである」とされているが、このことも両者の類似性を示すものである。言い換えれば、動物の激情と天使の「激情」との間にはこだまと音の間にあるような関係が存在することにより、また、それぞれを引き離す存在上の隔たりにより、互いには完全に非類似でもなければ、完全に類似しているのでもない。互いの関係はまさに「非類似の類似性」の関係である。ディオニシオスによると、シンボルとそれが象徴し意味するところの实在の間の関係はつねに「非類似・類似」関係<sup>(23)</sup>、あるいはそれを一言で表す場合、「類比」関係<sup>(24)</sup>である。

このように、ディオニシオスによるシンボルの解釈原理を「ふさわしい適合」という表現のみならず、「非類似・類似」、「類比」などという概念によっても表現することができるのである。

以下に紹介するディオニシオスによるいくつかのシンボルの解釈は、この原理をより一層明らかにすると思われる。

#### 4. 1. 「大」と「小」および「不動なるもの」と「動くもの」という神名の解釈

「大」と「小」についてディオニシオスは次のように述べている。

神は聖書のなかで、その大きさによって「大きなもの」と讃えられる一方、仄かな息吹によって神の「小ささ」が示される。神はその特有の大きさに従って、「大きなもの」と名づけられる。……神はすべての場所を包含し、すべての数を凌駕し、すべての無限を越えてゆく。神はそのすべてを越えた充滿と偉大な業の遂行と根源的な賜物によって、「大きなもの」といわれる。この根源的な賜物は、無限なる自己贈与の奔流として万物に分け与えられるのである。それは全然減少することがなく、すべてに越えて充足し、分け与えることによって減少するどころか、むしろますます勢いよく漲り溢れるのである<sup>26)</sup>。

他方神が聖書において、「小さいもの」、さらには「繊細なもの」といわれるのは、神がすべての量塊や距離にとらわれることなく、すべてのものを通して妨げなく進んでゆくものだからである。……神における小さいものとは、次のように考えるべきであろう。神はすべてのものへと赴き、すべてのものを通して妨げなく進み、そこで働きかけるのである<sup>26)</sup>。

このように、ディオニシオスにとつては「大」が神の超越性と万物への無限なる賜物を意味するのに対し、「小」が神の万物における内在性を意味しているのである。神に關して用いられる場合、「大」と「小」は決して空間的な意味を持たない。この解釈において、彼が以上のシンボルの解釈原理に従い、この世における空間的なものを神に「ふさわしく適合させた」ことは明白である。

また、「不動なるもの」と「動くもの」について次のように述べられている。

神はまた永遠に「静止せるもの」、「不動なるもの」、「永遠に王座につくもの」であるが、他方すべてのもの

の向かつて歩むものとして「動くもの」である<sup>26)</sup>。

ところで我々が神の「静止」とか「座」ということについて語る時、何をいおうとしているのだろうか。それは神が自分のなかに留まっていること、不動の同一性のうちに留まってしっかりと安定していること、万物を越えた所に揺らぐことなき座を占めているということ……そのことをまさに示すものであつて、それ以外のものではない<sup>27)</sup>。

では今度は聖書を書いた人々がその不動なるものが万物に向かつて発出し動いてゆくという時、我々はどうか考えればよいのか。このことも神にふさわしく理解すべきではないか。なぜなら神が動くことを敬虔に考えてみれば、それは移動でも変化でもなく、異化でもなく回転でもなく、直線運動・円環運動およびその合成運動などの場所的運動でもなく、知的運動でもなく心的運動でもなく物理的運動でもない。むしろ神の「運動」とは、神が万物をその存在へと導き保つこと、万物についてあらゆる仕方で配慮すること、……万物に

向かつて配慮しつつ発出し活動することによって、万物に現存することを示す<sup>28)</sup>。

この場合もまたディオニシオスは、この世における可感的な概念を、神に「ふさわしく適合させる」。「不動なるもの」は神の超越性、「動くもの」は、神の万物における発出、また、万物におけるその超越的な仕方での「現存」、すなわち内在性を意味している。

そして「大」と「小」の場合と同じく、「不動なるもの」と「動くもの」の場合も、解釈はシンボルを「転移」して「非類似・類似」、つまり「類比」により行われるのである。

#### 4. 2. 神の「三次元」のシンボリズム

ディオニシオスの神の「三次元」の解釈を分析するため、再びこの箇所を引用する。

もし物体のもつ三次元を触れ得ず形のない神に適用しようと思うならば、神の「幅」とはすべてのものに拡がってゆく神の発出をさすのであり、神の「長さ」と

はすべてのものに極度に張りつめる力であり、「深さ」とはいかなるものによつても把握されず知られることのないその秘密をいうのである<sup>⑩</sup>。

この空間の三次元というシンボルを用いた、見事な類比による神の特性の表現には感嘆を禁じ得ない。神の「幅」と「長さ」あるいは「奥行き」は、可感的世界では無限の幾何学的平面を形成する幅と奥行きに対応する。神の「幅」と「奥行き」それぞれは、「すべてのものに拡がってゆく神の発出」と、「すべてのものに極度に張りつめる神の力」を意味し、それぞれは創造界における神の内在性のシンボルとその働きのシンボルである。言い換えれば、創造界における神の顕現をなす内在性と働きは、類比によつて可感的（幾何学的）平面に対応する。一方、神の「深さ」は可感的（幾何学的）高さ、つまり無制限の平面の中心を貫く軸に対応する。

ところで、幾何学的には平面を貫く軸はこの平面それ自体には属さない。それと同様に、神の「深さ」は、創造界における神の顕現——その内在性と働き——を超え、その超越性を意味する。というのも、神の「深さ」は「いかな

るものによつても把握されず知られることのないその秘密をいう」からである。

このように、ディオニシオスの神の「三次元」というシンボルの解釈においてもまた、「転移」および「類比」という彼のシンボルの解釈原理を改めて見出すことができた。

#### 4. 3. 「火」のシンボリズムの解釈

以下に「火」というシンボルの例を挙げることにする。それによつてディオニシオスによるシンボル解釈に関し、シンボルが本性により有している特徴のきわめて重要な役割を明らかにしたい。すなわち、火はその本性によつて、その自然性によつてシンボルとなるが、同様のことはいかなるシンボルにも当てはまるのである。

『文書』における火のシンボルに関して特に美しい個所は、『天上位階論』の第一章第二節に見出される。

神のことは〔聖書〕がほとんどすべての聖なる叙述に優つて火に関する聖なる叙述を尊重しているのが見出されるのはなぜなのかということを探究しなければな

らない。実際、たとえば、あなたは神のことばが単に燃えさかる車輪だけでなく、燃え上がる動物と火のようさらさら輝く人々も描写しているのを見出すであろう……。また、神のことばは、……〔天使の位階の〕上位の者に対しても下位の者に対しても全般的に特に火の形象を重んじているのである。……神について教えている聖なる人々は、……神性の根源の特性の多くの似姿——目に見える事物においてのことではあるが——を有しているような火でもってさまざまな仕方描写しているのである<sup>31)</sup>。

この引用から分かるように、火というシンボルは他のシンボルと比べて「優れて」神性原理および天使を表現するために用いられるのである。なぜなら、火のさまざまな特徴が、「神性の根源の特性の多くの似姿を有している」からであるが、天使についても同様のことが言える。では、神性原理に限って、それとの類似性を顕す火の特徴は、どのようなものであろうか。ディオニシオスは続けて次のように述べている。

実際、感覚で捉えることのできる火は、いわばすべてのものに存在していて、混じり合うことなしにすべてのものを貫いているが、しかしすべてのものから隔絶している。……それ自身の働きをその中に示すことのできる物質が存在しなければ、それはそれ自体として認識することができない。……それが入っていくことのできるものは自分自身の働きに変えてしまう。……それは支配されず、混じり合うことなく、不変である。……それは包括するが、包括されることはない。それはほかのものを必要としない。……それは目に見えない仕方であらゆるものに現存し、よく注意しなければ存在していないように見える。……それは満々と満ち溢れて自分自身を分与するどんな場合にも減少することはない<sup>32)</sup>。

以上の言葉は、シンボルとして用いられる「火」がなぜ、どのような特徴によって神性原理を象徴するかを、他の解説が不要となるほど明らかに述べている。それでもいくつかを具体的にすることにしよう。

(1) 火は「すべてのものに存在していて、混じり合う

ことなしにすべてのものを貫いている」が、それは神性原理の超越的な仕方での万物における内在性を象徴している。

(2) 「しかしすべてのものから隔絶している」が、それは神性原理の万物に対する超越性を象徴している。

(3) 「それ自身の働きをその中に示すことのできる物質が存在しなければ、それはそれ自体として認識することができない」が、同様に神性原理に関する認識は、それ自体としてではなく、被造物を通してのみ可能であるのである。

(4) 「それが入っていくことのできるものは自分自身の働きに変えてしまう」が、これは神化への道における神性原理の働きと同様である。

(5) 「それは目に見えない仕方であらゆるものに現存している」が、神性原理の被造物の内における、超越的な仕方での現存と同様である。

(6) 「それは満々と満ち溢れて自分自身を分与するどんな場合にも減少することはない」が、神性原理が例外なく万物によって分有されている。しかし、このことは自らにはいささかの影響もないと同様である。

このようにその本性から生じる火の属性は、神的な実在に対応している同様の属性の類比であるところから、それ

を象徴するのである。以下、類比に基づいて、火の特徴と神性原理の属性の間に存在する対応関係をいくつか選び、次の表〔次頁参照〕によって火のシンボリズムをまとめてみたい。

### おわりに

ディオニシオスによるシンボルの解釈原理を説明することは、彼の形而上学全体を前提とするゆえにけつして容易なことではない。筆者が『文書』の理解から得たこの解釈原理の要点を次のようにまとめてみたい。

聖書に見られるものであろうと、秘蹟に見られるものであろうと、シンボルの解釈とは神におけるその原型を知ることであるが、この認識は存在階梯において神までの上昇を前提とする。ところで、この上昇を可能にするのは、秘蹟において用いられるシンボルである。シンボルの解釈と上昇とは平行して行われる。ロックが述べるように、「上昇は、一なるものあるいは神的真理をあるがままに捉えるため、つねに可感的、あるいは可知的な支え（シンボル）を何か前提とする。……シンボルと上昇は、切り離すこと

シンボル

火の本性による特徴

神性原理

類比による神性原理の属性

すべてに存在し、現存する、すべてを貫く

↓

万物における内在性や現存

混じり合うことなく、すべてから隔絶している

↓

超越性

その働きを通してのみ知り得る

↓

結果によつてのみ知り得る

不変である

↓

不変性

包括する、包括され得ない

↓

万物を包括する、包括され得ない

他のものを必要としない

↓

自立性

存在しないように見えること

↓

不可視である

のできない相関、連帯関係にある概念である。上昇において以外に、また上昇によらずして真のシンボリズムはない。そしてシンボルを用いない上昇はない」<sup>33)</sup>。

性の眼によつて観照し、知るのである。知った後は、それを伝えるだけである。

シンボルの解釈にとつて不可欠なのは、存在上と同時に認識上の上昇である<sup>34)</sup>。秘蹟において用いられるシンボルを支えとする聖霊の働きかけは、神化を目指す人を徐々にその内的存在様態を上昇させ、その知性を統一化させ、その認識の領域を広げ、ついに神化させる。神化に達する

参考文献

人こそ、神におけるシンボルの「真理」と「美しさ」を知

*Corpus Dionysiacum I*, Beate Regina Suchla, Patristische Texte

und Studien 33 (Berlin-New-York: de Gruyter 1990)



- Corpus Dionysiacum II*, Gunter Heil und Adolf Martin Ritter, Patristische Texte und Studien 36 (Berlin-New-York : de Gruyter 1991);
- Œuvres complètes du Pseudo-Denys l'Aréopagite*, trad., commentaire et notes par Maurice de Gandillac (Paris : Aubier 1980, Montaigne 1943).
- Pseudo-Dionysius: The Complete Works*, trans. by Colm Luibheid; foreword, notes and translation collaboration by Paul Rorem (New York, Mahwah: Paulist Press 1987).
- DN = 『神名論』 (De divinis nominibus)
- CH = 『天上位階論』 (De coelesti hierarchia)
- EP = 『書簡集』 (Epistulae)
- 『ディオニシオス文書』からの引用は、『神名論』熊田陽一郎訳『キリスト教神秘主義著作集1』(教文館一九九二年)、『天上位階論』今義博訳『中世思想原典集成3』(平凡社一九九四年)、『書簡集』月川和雄訳による。一部修正。
- 注
- (1) EP 9, 1105D.
- (2) EP 9, 1104BC.
- (3) EP 9, 1105AC.
- (4) CH 136D-137A.
- (5) CH 140C-141B. キヤホニオンキスゴヨク階級、不階級ハハキニド階ノト Ysabel de Andia, *Denys l'Aréopagite: Tradition et Métamorphoses* (Paris : Vrin 2006), 65-67; P.E. Rorem, *Biblical and Liturgical Symbolism within the Ps-Dionysius Synthesis* (Toronto: Pontifical Institute of Medieval Studies 1984), 91-96 参照。
- (6) EP 9, 1105BC.
- (7) EP 9, 1105C.
- (8) DN 700D.
- (9) CH 328A; EH 397D; EH 428C; DN 700D.
- (10) EH 501C; DN 592D 参照。
- (11) DN 585B-588A.
- (12) DN 681C.
- (13) René Roques, *L'univers dionysien : structure hiérarchique du monde selon le Pseudo-Denys* (Les Éditions du Cerf 1983, Édition Montaigne 1954), 208, 221.
- (14) René Roques, *Structures théologiques : de la gnose à Richard de Saint-Victor* (Presses Universitaires de France 1962), 171.
- (15) DN 684CD.
- (16) DN 913A.
- (17) DN 913AB.

(18) EP 9, 1108CD-1109A.

(19) Jean Pépin, «Aspects théoriques du symbolisme dans la tradition dionysienne. Antécédents et nouveautés», in *Simboli e Simbologia nell'Alto Medioevo* (Spoleto 1976 t. I), 37-38.

(20) CH 144BC.

(21) CH 141CD.

(22) CH 337BC.

(23) 「非類似・類似」の概念は「テオファニア」思想、またこの思想が伴う他の教義、たとえば因果関係、存在階梯における存在の伝達、分有論、事物における神の内存在性などに根ざしているのである。この思想によれば、すべてものは神を顕す (theophania)、『ゆえに神のシンボルでもある。事物・シンボルはすべての原因である神に同時に「非類似」と「類似」である (CH 137D-140A; 141C; 144A; 145A; DN 916A)。原因から存在論的に隔てられた結果として非類似であり、その存在のゆえ原因に分有しているものとして類似である (DN 916A)。

「非類似・類似」という特徴のゆえに事物・シンボルが象徴しているところの实在を隠していると同時に表しているのである。その結果、この实在にについては事物・シンボルが「聖なる帳」(hiera parapetasmata) である (DN 592B; CH 121B)。非類似・類似性の概念、およびある実

在を隠す・表すというシンボルの機能については、Eric D. Perl, *Theophany: The Neoplatonic Philosophy of Dionysius the Areopagite* (State University of New York Press 2007), Chapter 7 "Symbolism", 101-109 参照。

(24) DN 700C; 872A.

(25) DN 909BC.

(26) DN 912A.

(27) DN 909B.

(28) DN 916B.

(29) DN 916BC.

(30) DN 913AB.

(31) CH 328D-329A.

(32) CH 329ABC.

(33) René Roques, *Structures théologiques*, 330.

(34) ローレンのシンボル解釈と上昇の関係に関する結論に従うに、いとと思われる。彼によると、上昇は解釈過程においてそしてそれによって行われるし、解釈過程こそ知的観照の領域に導くべき (Paul Roerem, *Biblical and Liturgical Symbolism*, 116; 121)。